

メッセージアウトライン

ヨハネ9：13～34「ただ一つのことだけ」

生まれつき盲人であった男はイエスによって目をいやされた。近所の人たちや、前に彼が乞食をしていたのを見ていた人たちは彼をパリサイ人たちのところへ連れていった。(13)「パリサイ人」＝聖書の戒めを厳格に守り行っていた宗教者たち。この盲人であった男がいやされたのは仕事をしてはならないと禁じられている安息日(土曜日)であった。(14)→出エジプト20:10 パリサイ人たちはイエスが安息日に男の目をいやすという仕事をしたと考え、「その人は神から出たのではない。安息日を守らないからだ」と断定した。(16)しかし他の者たちは、「罪人である者に、どうしてこのようなしるしを行うことができよう」(16)と言った。彼らの間に分裂が起こった。そこで彼らは矛先を変えて、盲人であった男に、「あの人が目をあけてくれたことで、あの人を何だと思っているのか」と尋ね、これに対して彼は、「あの方は預言者です」(17)と答えた。これが彼にできる最善の答えであった。事実として、盲目であった男の目があいているのに、パリサイ人たちはこのことを信じようとせず、ついにその両親を呼びだして尋問した。(18,19) 両親は彼がたしかに自分たちの息子で生まれつき盲目であったことを認めたが、誰がどのようにしてその目をあけたのかは知らないと言った。そしてパリサイ人や他のユダヤ人たちを恐れたので、「あれはもうおとなです。あれに聞いてください」と言ったのである。(20~23) 「会堂から追放する」とは、ユダヤ人は皆、安息日ごとにユダヤ教の会堂に集い礼拝していたので、そこから追放されるということはユダヤ人社会から疎外される、その交わりから断たれるということを意味する。そこでパリサイ人たちは、再び盲人であった男を呼びつけて同じことを尋ねようとした。(24)「神に栄光を帰しなさい」→このこと自体は神を信じる者なら誰でもなすべき当然のことであろう。しかしここではそれが、「神とその御名にかけて本当のことを言え」という詰問のことばとして用いられている。彼らは権威ある者らしく立派なことを言うが、「私たちはあの方が罪人であることを知っているのだ」ということにおいて、彼らの誤りや偏見をさらけ出しているのである。「あの方が罪人かどうか、私は知りません。ただ一つのことだけ知っています。私は盲目であったのに、今は見えるということですよ」(25) 彼は学問も教養もなく、また弁が立つということもなかった。しかし、彼は事実の上に立った。伝統も宗教的知識も権力もくつがえすことのできない事実、「私は盲目であったのに今は見える」。ただそのことだけを知っていると彼は答えた。パリサイ人たちは当惑してまた同じことを彼に尋問している。(26) 彼はだんだん勇気が出て来て、「なぜもう一度聞こうとするのです。あなたがたも、あの方の弟子になりたいのですか」と答えた。ここに来てパリサイ人たちは冷静な態度を失って彼をののしるようになった。(28~29) 彼らの心のかたくなさが真実を理解することをできなくしているのである。盲人であった男はますます大胆になってイエスの側につく発言をした。(30~33) しかしパリサイ人たちは遂に彼を追い出してしまったのである。(34) 私たちもたとい多くのことを知っていなくてもこの盲人であった男と同様に、「私はかつて罪の中に死んでいた霊的盲人だった。しかし今は神の御子イエス・キリストによって救われて、光が与えられ、いのちが与えられている」と証しする者とならなければならない。